



宇宙船

1000

φύλαξ

峯村
明

登場人物

☆ クレス・グラヴァシュ

クロアチア出身

ドイツのロストック大学およびアメリカのマサチューセッツ工科大を卒業 学位をいくつももっているらしい

☆ マリナ・ロビンソン

オーストラリア出身

十三歳までテニス・プレイヤーを志していた

父は火星開発インダストリーの最高執行責任者。母は同社所属の植物学者

☆ タカムラ・ジュリア

タカムラ教授（MIT出身・火星開発インダストリー所属）の娘

教授は火星で事故死

天涯孤独の身となりインダストリーが運営する学校に移る

目次

[フォボス…ステーションβへ](#)

[あれから二年](#)

[グラヴァシュ家の祖先は遥か東方から](#)

[シベリアの要塞都市](#)

[きみたちはふたりでひとり](#)

[ことは祖先が地球で難破した時にまで遡る](#)

[あとがき](#)

[奥付](#)

宇宙船七月号

フォボス…ステーションβへ

1

どうしよう——

月ステーションから到着した便から降りた乗客たちの雑踏のなかで少女は呆然と立ち止まった。道に迷ってしまったらしい。

火星のこの駅で降りることまではわかっているのだけれども、乗り継ぎの仕方がわからない。いくつか出ている支線の名称は聴き慣れないもので、大慌てで家を飛び出してきた十四歳の田舎出身の少女を混乱させていた。

荷物は小ぶりのポストンバッグがひとつだけ。思いついて小旅行に出かけてきたといういで立ちだが、慌ただしくきょろきょろとあたりを見回す様子は気楽な旅行者のようではなかった。

行き交う人々はみな物慣れた様子で、それぞれの目指す支線の乗り口に吸い込まれていく。

どうしようどうしようどうしよう！

時刻表ではあと一分で次の便がでることになっている。その便にすでに予約をとってあって、支払いも済んでいる。

そうだ、だれか……係員さんに聞いてみよう

ようやくそう思いついて、いきなり歩き出したところで、左から来た人間とぶつかった。あっと思った時にはもっていたスマートフォンが手から飛び出し、前方の床の上で跳ね返った。

2

女声が早口で何か言った。ごめんなさい、という謝罪の意味の外国語。ぶつかったのは若い女性だったのだ。そのひとはかがみこんで少女のスマートフォンをひろいあげ、しばらく手のひらにのせてじっと考え込むようだった。それから、

「大丈夫ね」、と言った。こんどの言葉は少女にもわかった。けど、なにが大丈夫なんだろう。

「あの！！」

「はい？」

「ステーションβ行きの便に乗りたいんです！ どこで乗ればいいのか？」

「ステーションβ？ フォボスの？」

単に聞き返したのではなく、けげんな響きがあった。眉をひそめたせいかもしれない。少女よりも三つ四つ年上で、意志的な目をしている。その目が上方を見上げ、電光掲示板を探す。「あら。出ちゃったみたい」

「え……」

力が抜けて、へなへなとその場に座りこんでしまう。予約してあったのに。支払い済みなのに。

「ごめんなさい。あたしのせいね」

気がつくやうに相手の女性もその場に膝をついて少女の顔をのぞきこむようになっている。

「あの、訊いてもいいかしら？ どうしてフォボスへ？」

「父が……フォボスで事故に遭って……遺体の確認に」

女性の薄青色の目がはっと見開かれた。「そうだったのね……」

それから「来て」、と少女の手をつかむ。

3

「え。どこへ？」

「あたしたちもフォボスへ行くところなのよ」

「え、あ、待って、バッグが！」

女性は長身で力が強く、動きは機敏だった。小柄な少女の手を握ってずんずんとステーション建物の奥へと入っていく。

*

これからフォボスへ行くところだといいいながら、女性が入って行ったのは事務室か居住区のような一画だった。少女は怯え始めた。このひと、なんなの？ 私はどうなっちゃうの？

女性はある部屋の前で足をとめ、ドア脇の壁についた小さな機械に手のひらをかざ

す。ピン、と音がし、扉が開く。ひとつ開くと、次のが。二重の扉。

「お待たせ」、と彼女が入った場所のごく普通の、リビングのような部屋だった。しかしそれほど広くはなく、天上も高くない。けれども居心地は十分によさそうに見える。室内全体の色調が抑えられていて、照明も柔らかいせいだろうか。

部屋の中央にデスクがあり、その前に座っていた人が、「うん」と応えた。男だった。彼はデスクから目をあげて、入ってきたふたりを見た。女性と同じ、薄青色の目。「お客さん？」

女性は少女の手を握ったままだ。「お客さん、そう、ゲストね。お名前を伺ってもいいかしら？」

「タカムラ・ジュリア……です」

それを聞いたとたん、彼はそろそろとデスクから立ち上がった。そうすると背格好といい、顔の作りといい、ジュリアの手をにぎっている女性ととてもよく似ていることがわかった。

「タカムラ先生のお嬢さんよ」

彼は立ち上がった時と同じようにそろそろと座り直した。「すると——フォボスへ？」

ステーションβとは火星の衛星フォボスに近い宇宙ステーションである。

「そういうことね」

「わかった。βへの定期便は？」言いながら手を動かし始める。何かを操作するよう
に。

「今さっき、出発したとこ。彼女、それに乗る予定だったんだけど、あたしがぶつかっ
て……邪魔しちゃったってわけ」

「そうか、それは怖かっただろうね、こいつの体当たりはぼくでも吹っ飛ぶもの」彼は
ちらとジュリアをみて言った。

「さて、とりあえずそのへんに座って。立ったままだと転ぶかもしれない」

ジュリアは手を引かれるまま、デスク脇のソファに腰を下ろした。なにがなんだかわ
からない。私はフォボスへ行かなくちゃならないというのに――

彼はマイク付きのヘッドセットをつけ、誰かと話している。準備完了……当船はス
テーションを離脱する……離脱を承認する

どこかで、がこん、と鈍い音。鈍い衝撃。

……航海の無事を祈る……ありがとう

何が起きているのかわからず、ジュリアはおろおろと言わずにいれなかった。
「あの……！ 私、どうなるの！？」

「ああ、説明しなくちゃね。あたしたちもフォボスへ行くところなのよ。これはプライベート・ボート」

宇宙ステーションの外壁の一部がスライドし、中から流線形の飛行艇が滑り出してくる。彼らのリビングはそのまま飛行艇のコクピットでもあった。

そういえば真っ先に彼女はそんなことを言っていたとジュリアは思い出した。しかしまさかステーションの居住空間が飛行艇そのものだとは思ってもよらなかった。定期便のステーションはもっと混沌としていた……

周囲がふっと暗くなる。見上げれば天井は透明なドームとなり、そこには宇宙空間が広がっている。

「このボートはタカムラ先生のなんだよ」

「父の！？」

「タカムラ先生発案、ぼくらが造った。まさかこのボートに先生のお嬢さんを載せて、先生を迎えに行くことになるなんてね」

「父を迎えに？」

「そうなの。先生のご遺族とは現地でお会いすることになったのよ」

彼女はいまだにジュリアの手を握っていた。柔らかい手だった。

「自己紹介がまだだったわ、あたしはマリナ・ロビンソン。彼はクレス・グラヴァシュ」

「どうぞよろしく」

「お父さまに間違いありませんか」と係官から尋ねられ、ジュリアはただ小さくうなずいた。泣き崩れるでもなく、号泣するでもなく、さめざめと泣くでもなく。ただ黙って、灰になった遺骨を納めた容器が宇宙空間へと放出される様子を見ていた。時間が経てば自然に解体し、すべて灰となって宇宙へ蒔かれる仕組みになっている。

マリナが隣へ腰かけた。改めてよく見れば、彼女の全身黒の服装は葬儀に立ち会うためだったのだ。クレスも同じ服装だった、どちらも同じくらいの長さの、やわらかくうねった金色の毛が肩にかかっている。並んでみて違うのは背の高さと肩幅くらいだ。

「十年くらい、会ってなかったの」

ジュリアはふいにつぶやいた。「私が四つか五つのころ、仕事だから、って出かけて行って、それきり」

「お母様は？」

「亡くなりました。三か月前に。病気で」

「そうだったの——！」マリナはため息と共に言った。「先生、そんなことひとつも——！ 奥様とお嬢さんを故郷へ残してきたとはおっしゃってたけど」

「いちおう、会社には伝えたんですけど。もしかしたら連絡がつかないかもしれないっていわれました」

「三か月前といえば」

壁に寄りかかって外をみていたクレスが口をはさんだ。「電波状態がよくなかったころだな、正常に戻ったのはつい最近だ」

遺灰がゆっくりと遠ざかっていく。このまま宇宙空間を永遠に漂うのかもしれない。あるいはどこかの惑星に惹きつけられて衛星になってしまうかもしれない。いずれにしても、死者を船で地球まで運んで葬るのはひじょうに高くつくので、地球外で亡くなった人は星間葬が一般的だった。

「おふたりはいつもいっしょなんでしょう？ うらやましい……」

それは天涯孤独の身となってしまった十四歳の少女が他人に対して抱く、ごく自然な感想ではあった。ジュリアの言葉に『おふたり』は目を見交わした。

「あたしたち、双子に見えるらしいんだけど。じつは他人同士なのよ」

マリナがおかしなことを言い出したのでジュリアは思わず顔をあげて聞き返した。

「どういうことですか？」、と。

「えーとね……あたしはオーストラリア生まれのオーストラリア育ち、彼はクロアチア生まれのアメリカ育ち。生まれも育ちも別々の。ね、見事に他人でしょう？」

「はあ……」

「でも生年月日は同じなの、生まれた時間までもね」

ジュリアは混乱してきた。ふたりはまったく同じ日の同じ時間に、地球上の別々の場所で生まれたというのだ。

「あなたのお父様は火星開発インダストリーという会社に在籍されていたわね、あたしの父はその会社に関わっていて、あたしは父の仕事にはまるで興味がなかったんだけど。ま、重役のお嬢さまってとこね。

一方、クレスのお父さんはクロアチア出身の電気技術者で、妻子を連れてアメリカに渡ってNASAの下請けで働いてらした。子どもの時から出来が良かったクレスはいくつも飛び級して、十二歳でMITに入り、十四歳で卒業しちゃった。

あたしの父はその噂を聞いて、クレスに会いに行ったの。そしたらあたしにそっくりな子が出てきて……びっくりして……なんの冗談だ、おまえはこんなとこでなにをふざけてるんだって、たいへんな剣幕だったそうよ」

「びっくりしたのはこっちさ」

「今でこそ体型がちょっと違うけど、十三歳のころってほんとに見分けがつかなくなったらしいのね。あたしも最初は鏡を見てるのかと思ったくらい」

ジュリアは、はあ、としか言えなかった。世の中にはふしぎなことがあるものだと。

「でも、しばらくいっしょにいて、この子、他人じゃない、そう思うようになったわ。ものごとの感じ方、好むもの、好まないもの、考えていく道筋、思考回路がまったく一緒なのよ、自分がもう一人いる、いいえ、自分じゃない自分が自分の外にいるって、死角がまったくなくなるというのかしら、あら、ちょっといいすぎ？」

「気持ちはわかるよ。でも、死角がなくなるというのはちょっと危ない考えじゃない

か？」

「それはそうね、視界は常に全方位に向けておかなくちゃ」マリナはなにかをイメージするような目でいった。

「それはともかく」クレスは話を終わらせるように口調をあらためてジュリアに向き直った。

「きみのお父さんは、きみのことをずっと気にかけてたと思うんだ」

「そう……でしょうか？」十年も会っていないのに、と言いたげだ。

「ここへ来るのに使ったボートがあるだろ、タカムラ先生はあれに【七月号】って名前をつけたんだ」

「【七月号】??」

「変わってるわよね。あたしははまた、先生お気に入りの月刊誌でもあったのかな、と思ったものよ」

「でも今日やっとわかった。なんのことはない、きみのなまえじゃないか」

航空宇宙工学部門に在籍していたタカムラ教授の事故は『火星開発インダストリー』の業務中のものだったので、遺族に対しての保障は手厚くなされることになった。

「補償金は近いうちにあなたの口座に入りますからね、とにかく大急ぎでやってちょうだいってのはっばかけといたから」

インダストリー重役の娘であるマリナにはそういうことができるらしい。

「それからあなたが予約してあったステーションβ行き便の運賃も返してもらったわ。あたしがすっかり忘れてたのをクレスが気がついて手続きしてくれたのよ」

そういえばスマートフォンを貸してといわれたことを思い出し、口座を開けてみると、たしかに返金がされていた。さまざまな手続きに追われていて、今の今まですっかり忘れていたのだった。

「ありがとうございます、何から何まで」

ふっと息を吐きだし、ジュリアは時刻表を調べる。地球へ帰ることを考えなければならぬ時だ。

「そのことだけど……」マリナがそろそろと切り出した。「お母様も亡くなられたのだったわよね、地球に身よりはいらっしやるの？」

ジュリアはいいえ、と首を振った。ひとりで地球に帰り、ひとりで生きていかなければならないわけだ。父の会社の遺族補償があるとはいえ、現実は目の前がまっくらになる。

「あのね、会社から話があると思うけど、あなた未成年でまだ学生だから、そういう保障もあるの。つまり成人するまで、会社が運営する学校へ通えるのよ。細かなことはコンサルタントがサポートしてくれるはず」

「え——」と言ったきり、ジュリアは固まってしまった。そんなこと考えたこともなかった。

「ゆっくり、落ち着いて考えてみて。慌てなくていいのよ」

あれから二年

火星開発インダストリーの本社はオーストラリアにある。広大な敷地の中には本社のほかにエアポート、各種研究施設、学校、グラウンド、テニスコートまで備わっていて、それらをひっくるめてひとつの町だった。

学校は社員や研究者の子弟のためのものだが、研究施設の附属的なものでもあった。ジュリアはこの学校に転入して二年になる。

「会社所有の学校だけど、将来、会社のために働いてちょうだいてわけじゃないのよ。別の町の別の学校へ行ってる子もいれば、逆のケースもあるわ。選択は自由なの。だから、もし、いまいちな、って思ったら、いつでも言って。コンサルタントが骨を折ってくれるから」

重役のお嬢様の圧力もあってか、コンサルタントは親身にはたらいてくれた。以前住んでいた家の管理からジュリアの銀行口座の管理まで。おかげで彼女は学生生活に没頭することができたのである。

「もう二年になるのか。元気だった？」

「はい。おかげさまで。なにもかもおふたりのおかげです」

クレスは軽く首をふって笑った。「ぼくらはたいしたことしてないよ。それに『おふたり』はやめてくれないかな、きみとは友だちみたいな年齢なんだし」

「え、でも、あの、おふたりはおいくつなんですか？」

「十八」

あやうくレモネードを嘔きそうになって、ジュリアは慌てて飲みこみ、ごほごほと咳きこんだ。

「ほんとに！？……私とふたつしかちがわないんですか！？ その、もっと年上かと思っていました」

「ああ、昔から老けて見えるらしい」

「そんな……ただ、あんまり落ち着いてるから、てっきり……」

聞いたところによると彼、クレス・グラヴァシュはローティーンのうちドイツのロストック大学、アメリカのマサチューセッツ工科大学の両方を卒業している。その気になれば博士号をいくつもとれるだろう、と。頭の中が並の人間とはまるっきり違うのだった。

9

ロビンソン邸のテラスで話しをしていると、ロビンソン夫人がサンドウィッチをプレートに山のように盛り合わせて現れた。マリナの母親だが、まるで似ていない。黒髪のとやかな美女。彼女は植物学者である。

「久しぶりねえふたりとも。あら、ジュリアとはこの間文化祭でお目にかかったわね、クレス、マリナはどうしてる？」

「ああ、元気ですよ」

「ほんっとに、あの娘ったら、出てったっきりなんだからー」

「フォボスの基地から土を預かってきました。研究所に渡してあります。ロビンソン博士宛てに」

「あらありがとう！ 待ってたのよ！ 直行便で、速いのねえ！」

ロビンソン夫人はあれこれ世間話をし、仕事があるから、と言って席を立った。クレ

スが運んできた火星の土を培養して植物を育てるのだそうだ。

「またあとでね。晩ごはんはなにがいいかしらねえ」、と風のように去って行く。

＊

「あの、頼まれてたもの、持ってきました」

ジュリアは数冊の小版のノートテーブルに置いた。どれも古いもので、色が褪せ、傷んでいる。

「見ていい？」

「どうぞ」

いちばん上のを手に取り、開いたとたん、クレスは、うっと呻いた。

「これは——日本語？」

「そうですけど……」

「日本語かー、まいったなあ、ヒアリングはなんとかなるけど、読むのは……、これ、漢字だろう？」

「あなたでも苦手なものがあるんですね」

「そりゃあるよ。得意なものは得意だけど、苦手なものは苦手だね」

「くすくす……私、読みましょうか？」

「ほんと？　じゃあ、たのんでいいかな？」

数冊のノートはジュリアの父、タカムラ教授の生前の日記帳だ。もし、かまわなかったら、見せてもらえないだろうか、とクレスが云ってきたのだった。「タカムラ先生の研究のきっかけを調べている」と彼は言った。

自宅に置いていった日記なんかは役に立つものだろうかとジュリアは漠然と思った

が、「ちょっと行き詰ってしまってね。当時先生が何を考えていたのか知りたいんだ」という。

彼は持参のノートパソコンを取り出し、音声を異言語に文書化するソフトを立ち上げ、ジュリアにやり方を教えた。

「日時と場所を正確に。できれば人名も。それと、すまないんだけどプライベートなこともヒントがあるかもしれないから」省略しないでほしいというのだった。試してみて大丈夫そうだとわかると、さらにいくつか指示を出し、「今夜はここに泊まるんだろ？じゃあ、夕食のときに」

「え、どこかへお出かけですか？」

「うん、ちょっとね。夕食には戻るから」

ひとりテラスに残されたジュリアは呆然としてクレスを見送った。テーブルの上には日記帳が五冊。夕食までには終わらないかもしれないわと彼女は思った。それから、彼って細かいし強引だわ。

それでも作業に没頭し始めると、時間が経つのを忘れた。亡父の手書き文字は丹念で読みやすく、読むのに苦労はしなかった。それも一日あたり、二、三行の短い文章である。日時と場所と人名には注意して。読み上げるとパソコンのモニターに英文が形成されていく。けっこう楽しい作業かもしれない、と思い始めたとき。ふっと人の気配がした。

「マリナ」

「どーも」クレスと較べてかなり気さくな話し方をする。「ひとり？」

うなづくジュリアに、「なにか押し付けられたわね、クレスに」、とまっすぐに見て

くる。

「ええ、まあ」しどろもどろに応えると、

「けっこう強引よね、彼。うっかり気を許すとどこまでもつけ込んでくるわよ」

冗談なのか本気なのかわからない口ぶりである。テーブル上のサンドウィッチを目ざとく見つけ、ガラスのカバーを持ち上げ、上目づかいに「ちょっと休憩しない？」と誘った。「レモネード、おかわりは？」

作業を中断していると、マリナは「見ていい？」とノートに手を延ばしてきた。開いてみて、やはり、うっと呻く。漢字混じりの日本語はやはり苦手らしい。それでも、「タカムラ先生の日記ね」と凶星である。読めないページを指先でめぐりながら彼女はぼつりと言った。

「最近おかしいのよ、前みたいに気持ちに通じない」

「……………」

「今日だっていつの間にかいなくなっちゃって……ここへ来てるってわかったのは、ママから電話があったから。なにかあったのかって言ってきたのよ、いつもと様子が違うって」

「わ、わたし、めったに会わないから……ぜんぜん気がつかなかった……」

マリナは小さくいくつもうなずいた。「ごめん、へんな言い方しちゃったわ、あたしもどうかしてる、でもねえ……へこむのよ、さけられてるんじゃないかって思うとね」
(さけられてる?)

「ところであいつはどこ？」

「あ。さっき出かけていきました。行先は……聞いてません……」

「そうなの」

「でも、夕食には帰るって言ってましたから。帰ってきますよ、だいじょうぶ」

それを聞いてもマリナは気乗りしない様子でうなずいた。かえって気が重そうさえ

あった。

「まだ時間がありそうね。あたし、ちょっと気分転換してくる」

どこへ？ と目で問われ、庭園の向こうのテニスコートを指さした。「あなた仕事頼まれてるんでしょ。ひとりで壁打ちしてくるわ」

十三の年にクレスと出会うまで、テニスで生きて行こうと思っていた、と彼女は言った。プロプレイヤーを目指していたのだと。五歳のころからテニスラケットを握っていた少女が十三歳という重要な時期に夢を見限るほど、彼との出会いは衝撃だったのだ。

一時間もすると、マリナはわりとご機嫌で帰ってきた。「クラブのコーチに褒められちゃったわ。五年もブランクがあるとは思えないんですって。ま、あたしって才能あるから」

そのはしゃぎっぷりはかえって彼女の鬱屈を表していた。

結局、クレスは夕食の時間になっても戻って来なかった。ロビンソン母娘はずっとなにごとか話し込んでいる。気楽な世間話の雰囲気ではなかった。おかげで、といっちはなんだが、夜遅くになってジュリアの作業はようやく終わりが見えてきた。

「お茶をいれましょうね」、とロビンソン夫人がジュリアの様子を見に来たときだった。リビングのテーブルにいたマリナが、がたっと音をたてて立ち上がった。夫人が「どうしたの？」と振り向く。

「帰ってきたみたい」マリナはつぶやいてテラスへと走り出す。走るというより、まろびでる、といった感じで、彼女が具えているスポーツマンの機敏さや優雅さを欠いた動きだった。そのただならぬ様子に夫人とジュリアは思わず顔を見合わせた。

テニスコートを迂回し、本社ビルとの間にあるエアポートへ、マリナは走った。いやな動悸に足がもつれ、思うように走れない。負けるときのゲームみたいだという考えが頭をかすめる。

(このいやな感じはなに？ なんなの！?)

エアポートの照明のなかにボール型のポッドがいた。【七月号】が搭載している一人乗りのはしけのようなものだ。【七月号】自体は今人工衛星軌道にいる。

「クレス！！」

マリナは両手のこぶしで操縦席を覆っているキャノピーを叩いた。操縦席の様子はあきらかにおかしかった。

幾度か叩くうち、キャノピーが開いた。とたんに、むっとする異臭。

「あなたケガしてるの！！？」異臭は血の匂いだった。「どうして！？ なにがあったの！？」

「——マリナ」

「うん？」

「たのむ、大きい声出さないで。頭にひびく」

「い、意識はあるのね、よかった！ 今救急車を呼ぶ——」

「よせ。そんな時間はない。すぐにここを離れる」

「——なにを言ってるの、止血しなきゃ——」

「【七月号】でできる。ジュリアは？ ジュリアが持ってる資料は？」

「今来るわ、荷物抱えてるから、あれ、資料じゃない？ とにかく鎮痛剤を打ちましょう、これ、撃たれた傷？」

「すみませんお母さん。夕食に遅れてしまって」

ロビンソン夫人はポッド内の惨状に悲鳴を噛み殺しながら「いいのよそんなことは。夕食はジュリアが持ってるからあとでめしあがれ」気丈に言うのだった。

「ジュリア、わるいけど、こっちのポッドにクレスと乗ってくれる？ 一人乗りだから狭くてごめんね。飛ばし方は簡単だから心配いらないわ。彼が失神しそうになったら引っぱたいて起こしてやって。あ、ローストビーフはあたしが預かる」

二人を載せたポッドが離陸するのを見届けてからマリナは自分が乗ってきたポッドへ走った。「ママ、またね！」

夜風に黒髪をかきあげながら、ロビンソン夫人は吸い込まれるように夜空に消えて行く二機のポッドを呆然と見送った。

【七月号】は二機のポッドを収容するやいなや高速で地球周回軌道を離れる。一刻も早くできるだけ遠くへ、とクレスが主張したからだ。

医療ロボットが助手を従えて現れ、ケガの手当てを開始する。診断によると、左肩を弾丸が貫通していた。小さな弾丸で、骨を傷つけることなく貫通で済んだのです、幸運でしたね、とロボットはなんだか人間臭い所感を述べた。

が、マリナにはそういうことが問題なのではなかった。（左肩を？ 撃たれた？ 命を狙われた？ どうして？ どこで？ ——誰に？）

次々と浮かぶ疑問が頭の中をぐるぐると廻り、心をかき乱すだけで答えはどこからも

得られない。ケガを負った当人は麻酔で眠り続けている。

(彼、さいしょになんて言った？ たしか、時間がない、って、すぐにここを離れる、って、そう言ったわよね——)

——追手——？

手がコンソールの上を動いているが何をしているのか、さっぱりわからない。夢を見ているようだ。体が自分のものではないみたいだ。

【七月号】は母港へ向かっていない。まるで見当違いの方向へと突き進んでいる。

いったいどこへ——？

今、【七月号】を操っているマリナ自身、答えることができない。

勝手に動いていた手は一連の操作を終え、最後にボタンをひとつ押す。すると、【七月号】は自動操縦システムの手に移った。

急き立てられるように地球を脱してから、夢中で懸命に働いた気もすれば、なにもしていない気もする。頭がぼんやりする。クレスのケガと関係あるのだろうか。そういえば左肩が鈍く痛む……目がかすむ……

へんだ、と思った。視力はめっぼうよかったのに。とくに動体視力ときたら、時速二百キロ超という男子選手のサーブの軌道を見ることができたのだ。まあ、見えるというだけで受けることはできなかつたけどさ。

自虐的に考えて肩をすくめ、席を立とうとしたとき、コンピューターが操作されているのに気がついた。

マリナ自身ではない。じゃあ、誰——

はた、と後方を振り向く。そこには透明のカプセルで覆われた医療用ベッド。

「——起きてたの!？」

カプセルがするすると本体に収納されていき、ベッドのリクライニングが起き上がってくる。

ふう、と大きなため息。「やあ。おはよう」

「な、なにが『やあ。おはよう』、よ!! まだ起き上がっちゃだめよ! あなた大ケガしてるのよ!!」

「ああ、もう平気。ほら」

「え」

医療ベッドの異変を察知してロボットが駆けつけてきたが、上半身裸だったクレスは自分で包帯を解いてしまった。傷が——

「——うそでしょ——」

「今まであんなケガしたことがなかったからぼくも知らなかった。でもこういうことさ」

「信じられない——」

「きみだって3セットマッチ、三つ四つ続いても平気だって言ってたじゃないか。いたって丈夫にできてるんだよ」

「ば、ばか！！ テニスといっしょにしないでよ！！」

グラヴァシュ家の祖先は遙か東方から

14

「グラヴァシュ家の祖先は、はるか東方から来た、って聞いたことがあって、いつか行ってみたいと思っていた」

「……………」

「ウラル山脈の東のふもと、見渡す限り草原、地平線までステップが広がっている。ウチャガンカ川とカラガンカ川の合流点、チェリャビンスクの南、バシコルトスタンの南東、オレンブルクの東、カザフスタンの北。そのまっただなかにアルカイムがある。そこに円形のなにかがあると、丘から見おろした誰かが気がついた。古代の構築物の痕跡が土地に刻まれている。ロシアで最も神秘的な遺跡といわれている」

夢見るようにつぶやくクレスの手にいつの間にか金色の鎖があった。鎖を持ち上げる

と先端に径3センチほどの……中心に方形、そこから放射状に細いスポークが八方に伸び、円、さらにその外にも円、つまり二重の円形と中央の方形をスポークで繋いだ意匠が繋がっていた。

「子どもの頃、ドイツの大学へ行くことが決まったとき、曾祖父がこっそりくれたんだ。いつかおまえに必要なになるかもしれないからって。だれにも見せちゃいけないって。お守りだろうと思ってもらっておいた。ところが——この画像をみてごらん」

メインスクリーンを見るように促されたマリナは絶句する。「——おんなじ形!？」
形は同じだが大きさは同じじゃない。画像の左下にスケールが表示されているのだが、遺跡の直径は百メートルの一目盛りを二つ近く占めている。二百メートル近いということだ。

「そう、そっくりだろ？ この写真が初めて撮られたのはほんの百年くらい前だ。でも当時百歳を超えていた曾祖父は、彼の曾祖父から譲り受けたと言っていた。だからこのペンダントは百年よりもっと前のものだ。ふちの裏になにか彫ってあるけどすっかり摩耗してしまってる」

「ほんとだ……重いよね……」

「鎖と本体の材質が違う。鎖は十八金だけど本体がね、銅の合金かと思ったらそうじゃないんだ。調べてみたけどわからなかった。つまり、未知の金属さ。いつか必要になるってどういうことだろう。どうしても、現地へ行ってみなくちゃならないと思った。そこはおそらく祖先の土地だから」

「アルカームは明らかに事前に計画されて建造されたものだ。住人は鉱石から金属を抽出する方法を知っていたし、立体的な都市を創る知識もセンスも持ち合わせていた。ただ文字を持っていなかった。都市の周囲には大小無数の集落があり、農業を営み家畜を飼っていた。だが、最終的に都市から人は消え失せ、あとに残ったわずかな人々はその後、草原で牛を飼って暮らした。遺跡自体は四千年から五千年前のものと推定されている……っていうけど、じつはもっと古いんだ」

「四千年も五千年も前に、文字さえ持っていなかった人たちが、こんな大規模な建造物を創ったというの？」

「きみとぼくとは、どうやって意思を交換している？」

「精神感応——」

「そうさ、この方法なら文字は必要ないし、正確だ。ぼくらの間には文字は介在しないが、ぼくらは原始的か？」

「少なくとも、あなたは違うわ」

「ああ。ぼくはそう自負してる。文字とは記号化した言語だから、まず先に、言語、思考、想念があったはずだ。四、五千年前に文字を持っていなかったからといって原始的だったとはいえないんだ。おそらく、文字とは物質文明によるもの、物質次元の産物なんだとぼくは思うんだ——」

マリナはかなり困惑していた。まあ、今に始まったことではないが、彼の考えていることがよくわからないのだ。だから、彼が唐突に、「ぼくらはかつてアルカームで生きていたのかもしれない」と言い出した時にはあ然とした。マリナはいたって即物的にできていたから。

マリナ・ロビンソンにとって大事な今はこの時だ。今日の前にある状況、目の前にある一球とどう対峙するかがすべて、幼少時からそういう具合に叩きこまれ、馴染んできたために、テニスから離れた今でもどうしてもそういう考え方に立ってしまう。彼女

の血となり肉となっているのだ。

しかし今目の前にいる彼女の鏡像のような少年はまるで違う考え方をする。五千年前……あるいはもっと前に、ウラル平原のただなかにあった謎の都市に、ぼくらは、と彼は言った。当然のようにマリナも含まれている。

16

「それはそうと」マリナは呼吸を繰り返して懸命に態勢を立て直そうとする。訊かなければならない重大なことがあるのだ。

「ようするに、遺跡を見に行ったんでしょう？　言ってみれば観光よね。それで、どうして撃たれたのよ」

「ああ」、とクレスはいったん口をつぐんだ。なにげに気まずそうな表情が浮かぶのをマリナは見逃さない。

「ロビンソン家が夏だったからむこうも夏だと思いこんでいた。南半球と北半球とでは季節が逆だっていうのをすっかり忘れてたんだ」

「……それとこれとどういう関係が？」

「アルカイムは観光客を受け入れているんだけど、夏の間だけなんだ。冬はあの辺一帯、関係者以外の立ち入りができなくなる。冬季の交通事情もあるけど、いろいろと厄介なものがまわりにあるせいでね」

「なによ、厄介なものって」

「国家の機密さ、これ以上は言えない。まあ、そのことを失念していて、ポッドで空から進入して、うろうろと歩きまわってしまったってわけ。警告はされたみたいなんだ

が、こっちは長年の願いがかなって感無量で夢中になってたから、無視したあげく——」

「それで撃たれたっていうの！？ だけど左肩よ、左肩！、心臓すぐそこ！ 頭もすぐそこよ！！ 警告なら脚とか狙うってもんじゃないの！？」

「ほら、ぼくはポッドに乗ってた。エイリアンだと思われたんだよ、きっと」

なに考えてるのかしらというのがマリナの率直な思いである。エイリアンだなんて、冗談じゃないわ、人の気も知らないで！！

「わかったよ、そんなに怒らないで」さすがに気が咎めたクレスは相手をなだめにかかった。「だけど」

「なにが、だけど。よ！！」マリナは両手を腰に当てて相手をにらみつける。

「それほどふざけた話じゃなかったり、する」

「どういうことよ！！」

「警備が厳重だったのはうなずける。近くに核関連施設があるから」

「え」

「でも、ユニフォーム、銃、あれはロシアのじゃない」

「——なんだっていうの——」

「きみは知らないだろうが、秘密のプログラムがある。そう、『地球防衛軍』、みたいなものが」

「なによそれ」

「国を越えた組織さ。外から浸入してきた者から地球を守ろうというんだ。主導しているのはアジアの某国だ」

「———」

「今現在、航空宇宙工学の分野でもっとも進んでいるのはどこだか、知ってる？ インドでもロシアでも、アメリカでもない。火星開発インダストリー、MDIだ。タカムラ教授とぼくらのせいでね。だから防衛軍はMDIと手を結ぼうとした。ロビンソンCEOはノーと言った。理由はどうあれ、軍事目的の組織に与することはできない、MDIはあくまで民間人の福祉のために存在するのだと」

「——初耳」

「だろうね。だからぼくらの仕事場はフォボスにあるんだ。防衛軍関係者と接触させないためさ」

「——ねえ……ちょっと、思ったんだけど……タカムラ先生の事故はまさか……」

「ぼくもまさかとは思うんだが」彼は首を振った。「証拠がなにもない。でも、そのまさかが本当だった場合、ぼくも狙われるということだよ」

地球防衛軍とやらがあたしたちの才能を欲しがっているなんて——父であるロビンソンCEOもクレスも、とうに知っていたとは。

足元が頼りなく揺らぎ、そくそくと悪寒が足を這い上ってくる。くらりとめまいがし、支えを探して宙を泳いだ手をクレスが受け止めてくれた。

「大丈夫かい？」

マリナは力なく頭をふった。言葉がでてこない。

ジュニアクラスの国際トーナメントに優勝した十三歳の夏、初めてクレス・グラヴァシユに出会ったあの日から、なにもかも変わってしまった。

（あのころに戻りたい？）と自問する。自分のなかで答えがせめぎ合うのを感じる。五年前の成長期にあった時ならいざ知らず、長いブランクを経てプレイヤーに復帰したところでなにができるだろう。それはおそらく自己満足に等しい行為でしかない。そして、クレスと別れるとでもいうのか？

答えはすらりと出た。あり得ない。それはあり得ない。今のマリナにとって、彼のとなりにいることがもっとも自然なのだ。執着でも、依存でも、支配欲でもなく、穏やかに安定する。生来、攻撃的な性格だったのにそれが鳴りをひそめた。にもかかわらず自分が自分でいられるという自覚がある。

ふしぎなことに、彼に出会い、時間が経つにつれて異性に対する関心がどんどん薄れていくのに気づく。十代の多感な時期に異性に対してまるで興味が持てないのだ。ときめきを覚えることもセクシャルな気分になることもなかった。MDIには能力も外見も、人格的にも、魅力的な男性がいくらでもいたにもかかわらず。女性に対する興味というわけでもない。ひたすら精神的に……透明になっていく、とでもいおうか。

そういえば……タカムラ教授が言っていた。「きみたちはふたりでひとりなのだよ」、と。

意識的に呼吸を繰り返し、ふたたび態勢を立て直す。訊かなければならないことがま

だある。

「『地球防衛軍』といったわね、それは何のためにあるの？」

「外から浸入してきたものから地球を守るんだと言っている」

「……それだけ？」

「今のところは。一般に公開できないデータをたくさん持つてみたいだ」

「なんだか……うさんくさい」

「根拠は？」

「直感よ」

すると、クレスは声をたてて笑った。マリナはむっとする。

「あなた、ロビンソンCEOと相手の代表者との接見に同席したんじゃないの？」

「いや、してない。接見の内容の録音を聴かせてもらっただけさ。CEOに『どう思う？』って訊かれたんで、うさんくさいですねと答えた。『きみもそう思うか』、『マリナもぜったい同じこといいますよ』、そう言っておいたよ。当たり前だろ？」

「当たり前ね。で、そのうさんくさい連中がアルカイトでなにしてたのかしらね」

「あそこは特殊な場所だからだ」そう言って、彼はさっき取ったマリナの手を両手で握った。なだめ、落ち着かせようとしているようだった。

シベリアの要塞都市

19

「アルカймを含むカスピ海北から西、シベリア南部の広大な一帯には、古代から人が住み、いくつもの文化が起こっては栄え、消えて行った。遺構からたいていの集落は要塞化されていたことがわかってる。武具の出土も多い。頻繁に戦闘行為がされていたということだ。アルカймはそういう風土の中にあった。そのただなかに立ったとき、ぼくは不思議なものを見た……」

昔々、彼らの祖先はずっと東からやってきた。ぼくは彼らの足跡を遡って行った。東へ。東の方へ。やがて……信じられないものが現れた。見たこともない巨大な、石でできた都市だ。それは湖のほとりか、それとも、内海のほとりの岬の上にあった。空の色を映して真っ青で、すばらしくきれいな湖面に、白い石の都市が映りこんでいて、あまりにも……夢を見ているような景色で……ぼくは我を忘れた。

しかし、都市が巨石で造られたのには理由があった。そこはもともと遊牧民の、無限に広大なテリトリーのはずれだった。先住の遊牧民はあとからやって来て住みつこうとする人々を攻撃した。猛烈な攻撃だった。人々は幾度も全滅しかけ、そのたびに撤退し、遊牧民が去った後にまた都市を再建した。再び攻撃された時に備えて、堅牢な要塞としての都市をね。積み上げられた石のブロックはひとつが数千トンもある」

「それはいったい、いつのことなの？」

「五万年くらい前」

それが世界的に石器の時代であるくらいの知識をマリナは一応持っていた。毛皮を着たネアンデルタール人が石の矢じりのついた槍か何かを担いで荒野を彷徨し、洞窟で身を寄せあって暖を取り、夜闇に身をすくめ、野獣の襲撃の気配に耳をそばだてている、

そんなイメージが目には浮かぶ。

現生人類ホモサピエンスが登場したころでもあったっけ？ そんな時代に数千トンもの石を！？ どうやって！？

「忘れないで。彼らは精神エネルギーに通じていた。ということは物質次元より上の次元に存在したのかもしれない。石という『物質』を使ったのは残虐かつ執拗な遊牧民の襲撃に対処するためさ。

きみが思い描いている原始人とぼくらの祖先はどこかで顔を突き合せたのだろうけど、いつ、どこで、どんなふうに、それは謎だ。もしかしたら」

と、クレスは宙をみあげた。

「原始人たちはぼくらの祖先を、幽霊として感じていたかもしれないね」

「ねえ。あなたさっきから、ぼくらの祖先て言ってるけど」

「ああ。ぼくらだ。きみの祖先でもあるから」

「ある時、内海のほとりの都市から西へ向かって旅立つグループが現れた。移民団だ。西へ向かう移民団が彼らの祖先だった。そこへ加わった者たちがいる。その者たちは異種族で、困り切っていた。『船』を失くしてしまったんだ」

「船？」

「内海の底に沈んでしまい、取り返せなかった。しかたなく上陸し、出会った人々のなかに西へ旅立つグループがあった。難破者たちは彼らといっしょに行くことにした。集団に紛れ込んで移動したほうが目立たないしね」

「——目立ちたくなかったというの？」

「そうだ。『船』は襲われたんだ。内海上で撃ち落とされた」

「ちょっと待って！ 沈んだだけじゃないの？ 撃ち落とされたってどういうこと？」

「内海上を飛んでいるところを撃たれた。『船』は航空船だ。それも外宇宙から来た宇宙船だよ」

うっとマリナは唸った。言葉が出てこない。それでもさんざん逡巡してようやく言葉にしてみる。「それって——宇宙人？」

「そうだ。地球上で難破した者たち。それがぼくらの直接の祖先だ。きみの祖先でもある」

「ちょっとちょっと！ あたしの、ですって？ あたしたちは生まれも育ちもとんでもなく離れてるじゃないの！」

「今ではね」

「あのね、小出しにされると心臓に悪いわ。もっといろんなこと知ってるんでしょう？ 澄ましてないで、わかるように話してくれない？」

「いきなり祖先は宇宙人だなんて言われるほうがよほど心臓に悪いと思うけどな」

「宇宙船の搭乗員は十名だった。短期の調査が任務で、全員男だった。遭難して船を失くしたとわかったときの絶望といたら……ケガや病気で次々と脱落していき、残った者は現地の人間と出会ったとき、決めた。集団のなかに紛れ込み、彼らと生きていこうと。いずれ宇宙船を再建できる日がくるだろうから」

「当時の現地人はさすがにそんな技術をもっていなかったんでしょう？ ……気が遠くなるような話ね……」

「それでもほかに道がなかった。そして、今のぼくらが思うほど、何百年、何千年、何万年という時間は問題じゃあなかったんだな、それは時間というものが過去から未来へ直線的に進むという、物質世界に生きている人間が感じる感覚であって」

マリナはふうん……と鼻を鳴らすしかできない。意味がわからない。時間、そして空間というものは、肉体に染み込んでいる現実そのものなのだから。そんな彼女を歯牙にもかけない風情でクレスは淡々と話を進める。

「祖先たちは結婚を繰り返した。遺伝子を残す必要があったから。それでね、マリナ、きみの遺伝子を調べさせてもらった。祖先遺伝子検査というのをね。結果、99%の確率で同じ祖先を持っているとわかった——。ぼくらは祖先が遺した遺伝子を継ぐ者だったんだ」

「———」

「祖先の一族はずっと行動を共にしてきた。その彼らがとうとう道を分かつ時がきた。

ひとりは立ち止まり、ひとりはさらに先へ、さらに西へ進む道を選んだ。その人の名はロビンという。マリナ、きみはロビンの一族の子孫、ゆえにロビンの子、ロビンソンという名を持っている」

マリナは声もなくまじまじと、相手の目をのぞき込んだ。自分と同じ色をした、他者の目を。

22

「道を分かつ以前に、祖先はある経験をした。外宇宙にある母星からコンタクトを受けたのだ。母星は遭難した者たちを見捨ててはいなかった。探して、探して、ついに見つけたのだ。そして祖先たちが置かれた状況と経緯とを鑑み、彼らにさらなる任務続行を打診した。かつて彼らに下された任務を続ける意思はあるかと。それはこの惑星の調査だ。もっとも、最初の祖先たちは調査飛行の最中に襲われたのだったのだけれど」

「そういえば——集団のなかに紛れ込んだほうが目立たないとか、言ってたわね。そのことだったのね」

クレスはうなずく。

「それで、襲ってくるそいつはいったい何者なの！？」

「わからないんだ、いまだに。祖先の宇宙船を撃ち落としたのは自動迎撃装置のようなものだったらしい。それがどこにあって、誰が設置したのかもわからない。わかっているのは、それがおそろしく古く、おそろしく完成されたメカニズムで、もしかしたら今

もぼくらを狙っているのはそいつかもしれない、ということだけだ」

「——何万年も前から——？」

「そう、そのころ既に完成されていた。それが今も稼働している。そのために母星の宇宙母艦は地球に近づくことができない。それ自体ではないかもしれないが、その意志が人間に働きかけている」

マリナは彼の左肩に目をやった。そしてつぶやいた。「あたしたちに、敵意をもつて？」

23

「外宇宙にある母星がどうやって祖先たちを見つけ出したのか、知りたくないかい？
答えはアルカイクだ」

マリナは、はたと顔をあげた。「アルカイク！？」

「当時、祖先たちと共にいた移住者グループは頻繁に襲われていた。例の謎の敵対者じゃない。先住の遊牧民だ。連中は自分らのテリトリーを離れた土地まで執拗に追いかけてきた。病的な執着を感じるね。祖先たちは度重なる襲撃に疲れ切り、いったん、腰を落ち着かせることにした。砦を作って定住したんだ。しかし百年経っても二百年経っても襲撃は止むことがなかった。祖先たちはついにある決断をした。砦の中に遊牧民を誘い込み、閉じこめ、外から火を放ったんだ。非道な話だが、移住者グループもそのときには当初の半分以上にまで減っていたという。特に女性や子供が真っ先に狙われさらわれたというから彼らの受けた苦渋は計り知れない。ほかに生き延びる道があったかどうかは、神のみぞ知る、だな。

砦を設計したのは祖先たち、ロビンとグラヴァシュの兄弟だ。この形は——母星の母艦の形だ。母星の者ならひとめで同郷者がそこにいるとわかるくらい、特徴のある形だったんだ」

彼はペンダントヘッドを掲げてみせた。

きみたちはふたりでひとり

24

彼の態度がひどく冷静で真剣なだけに、今にもいきなり笑いだして全部冗談だといいたしそうだ。ひょっとしたらこの人、あたしをからかっておもしろがってるのかもしれない。けれど、銃撃されたのは事実なのだ。あらためてまじまじと相手の目をのぞき込まずにられない。

「ねえ、あなたいつからそんなこと考えてたの？」

すると彼は両手を広げて手のひらをマリナに向けた。なにも隠してはいないというように。

「そりゃあ、きみと出会ったときからさ」

「五年も前から——」

「きみは不思議に思わなかったのかい？ ぼくらは遠く離れた土地でそれぞれ生まれ

育ったのに、なぜ生年月日も見た目も同じなのか。一緒にいて違和感を感じないどころか、かえって精神的に安定するし能力が増幅されるのはどうしてだ？ 理由があるはずだ。それを知らなければならぬと思った。そしてそう思ったのはぼくだけじゃあなかった」

「誰？」

「タカムラ先生だよ。先生は言った。『きみたちはふたりでひとりなのだよ』と。情緒的な意味じゃない。先生は科学者としてそれを証明する方法はないだろうかと考えていた。ぼくらの遺伝子を調べるといふのは先生の案なんだ……」

「遺伝子検査なんて、あたし、聞いてないわよ」

「うん、正確にはきみの父上の遺伝子なんだよ。男性が持っている染色体を調べると父方の遺伝がわかる。もちろん父上は検査の趣旨をよく理解されたうえでのこと。それともきみは、検査結果に不服なんだろうか？」

「そんなんじゃないわよ。びっくりはしてるけど。でも、ひとこと言ってくれたっていいじゃない！」

「そうだね、わるかったよ」 クレスはあっさり認めた。負けず嫌いのマリナとの口論はひじょうにエネルギーを消耗すると、経験上よくわかっていた。彼女は攻撃的なファイターで、線が細くて内向的なクレスとは正反対だったのだ。

彼は話題を変えることした。「【七月号】のことだけど」

「マリナ、きみは【七月号】をどういう風に認識してる？」

またこむづかしいことを、とマリナの額に苛立ちの色が浮かぶ。もう、振り回されっぱなしだ。まるで主導権を握れない、ディフェンスに回るしかない展開。彼女が一番苦手なパターン。そのうち足も頭も動かなくなって失態を犯すことになる。

「【七月号】は、タカムラ先生の試作品でしょ。あたしたちは勝手にいじりまわして、いいように乗り回してたけど」

「きみは気づいていないようだけど、【七月号】は外宇宙へ出るための船だ」

「うそ——」彼女の頬に血の気が昇ったのは恥ずかしさのせいだ。思いがけない告白に、咄嗟になんというしょうもないリアクションをしてしまったことか！

「ぼくはきみに嘘をついたことなんかない、一度だって。これからもない。これは本当のことだよ。【七月号】の機能をきみがすべて把握してないのは無理もない。【七月号】にはどうしても作動しない機能があったんだ。タカムラ先生が創ったものだが、質問しようとしているうちに先生は亡くなってしまった。ところが——」

「？」

「ほんのいつとき、その機能にスイッチが入ったことがあった。というか、いつから入っていたのかわからない、まるで気がつかなかったんだ。ぼくはあわてて走査してみたが、スイッチは唐突に切れてしまった」

「なにがあったのよ——」

「考えられることがひとつだけあった。その時、あの娘が乗船していた」

26

「あの娘って——」

かつて【七月号】に乗船した人間は彼女らのほかにひとりだけだ。その娘は今【七月号】にいる。タカムラ・ジュリアだ。

負傷したクレスが、彼女とタカムラ教授の日記とを希望したので一緒に連れてきた。ジュリアはケガ人の看病をするうち、うとうとし出したので別室で休むよう手配して、たぶん今も眠っているはずだ。

「——ジュリアが？ あの娘がどうしたっていうの？」

「それがわからなくて。先生はたしか二十年以上まえから【七月号】の開発にかかっていたはずなんだ。それで、記録に当たってみようと考えついて、個人的な日記を見せてほしいとジュリアに頼んだ」

「あ、彼女が作っていたデータね。日本語の音声から英文に変換してた」

「そうだ。おもしろいことがわかった。十六年前、何かが起こった。個人的な日記だけど、書かれているのはもっぱら研究に関することばかりで、先生の関心はほとんど外へ向いていなかった。それが十六年前の七月のある日、その日の日記はとても嬉しそうで、満足げなんだ。なにかが完成したらしい」

「ね……え……十六年前ていったら、赤ちゃんが生まれたとか、そういうんじゃない？」

「それがそうじゃないんだ、先生のそれまで研究の延長にあることなんだよ。メカニカル、テクニカルな何かなんだ。日記を通して読んでみたけど、自分の家族のことに關することは何も書かれてない。家族の誕生日も、記念日も、旅行も食事も、なにも出てこない」

ぞっとする思いで、マリナは言った。「あたしたち、毎年誕生日をお祝いしてもらったわよね。それも先生自分でキッチンに立ってケーキを焼いてくださった……」

「ぼくは【七月号】という名は、先生が自分の娘にちなんでつけたものだとばかり思っていた。でも……ちがう……のかも」

マリナはクレスの視線を追った。【七月号】の航行をモニターしている計器の数々。ふだんは黒く沈黙している一画が今、明るいグリーンに輝いている――

「アレは――なんなの！？ なにを表しているの！？」

「【七月号】は今、亜空間に入ろうとしている」

「亜空間ドライブ――どうしても作動しない機能って――」

「先生が長年、二十年以上前から取り組んでいた研究だ。外宇宙へ出るための手段として先生は【七月号】を創った。それはある形で十六年前に完成した」

「まさか――ジュリアが鍵だというんじゃないでしょうね――」

「おそらく、ジュリアが先に生まれた。【七月号】に搭載する核心部分として。彼女は『生きたプログラム』なんだ」

そのとき

マリナは体が宙に浮くのを感じた。クレスの言葉にショックを受けたからではない。ショックを受けたのは【七月号】だった。頭上で電子音が鳴り出す。心地よい音ではない。神経を逆なでするような不協和音は警報だ。今までに経験したことのない事態がおきていた。

《警報》、と、電子音を圧して低い声が流れた。低いがよく通る声だ。

《被弾。当艦は攻撃を受けています。宇宙服着用。ヘルメット着用。不測の事態に備えて生体を保護してください》

宇宙服は着用者が船外に放り出されても数時間は生存できるように作られている。もし生身のままだったら——想像したくない目にあうのだ。

慌ただしく宇宙服を着こみながら、クレスは声を張った。「警報を発する者、あなたは誰だ!？」

《私はジュリア。当艦は私の管理下にあります》

低い声だがどこかにジュリアの色合いがあった。

「ジュリア。今何が起きているのか教えてほしい」

《当艦の現在位置は火星軌道と木星軌道の中間、小惑星帯を通過中。浮遊物体が大量にあるため攻撃元を特定するのは困難。攻撃を避けながら小惑星帯を抜け、攻撃者をおびき出すことは可能ですが》

「【七月号】に攻撃機能はなかったな」

《そのとおり。防御機能も自慢できるものではありません。当艦はただ航行の目的で造られました》

「だったら相手をおびき出すなど論外だ。逃げよう」

《了解。ただし生体保護は継続してください》

28

「逃げるって！ どこまで逃げればいいのか！」

《太陽系の外へ》

「はあ？」

《警告。攻撃が来ます……コース変更。しばらくお待ちください……間もなく小惑星帯を通過……通過次第、速度をあげて亜空間にはいります。ああ残念》

「どうしたの！？」

《木星は現在太陽の反対側、見ることはできませんね》

「いつか見られるわよ」

《それは当分かないません。当艦はこのまま太陽系を離れます》

《——亜空間に入りました。亜空間は当艦に付随したものであるため、外部からの干渉を受けません》

「攻撃はないということだな」

クレスはさすがにほっとした声でつぶやいた。が、通常空間からの移行はなんのショックもなかった。本当なのか、半信半疑であった。

「もう安全なの？ 宇宙服脱いてもいい？」

【ジュリア】はしっかり聴いていて、《理論上は安全ですが、当艦の亜空間フィールド発生装置は作動テストを行っておりません。テストの時間がありませんでしたので。一応安全のため、宇宙服着用は継続してください》と言ってきた。ぞっとしない話である。

マリナは腕を叩かれ、振り向くと、ソファに座るようクレスがジェスチャーしていた。

ことは祖先が地球で難破した時にまで遡る

《ロビンの子とグラヴァシュの子。ようこそ【七月号】へ。心から歓迎します》

警報を発したときとはかなり違う、明るい、しかし叡智を感じさせる落ち着いた声
で【ジュリア】は挨拶した。

「あらたまってそう言われるとね。きみはいろいろ知っていそうだ。話してくれるか
い？」

《クレス・グラヴァシュ。あなたが知っている以上のことを私は知らない。しかし私の
負った任務をお話できます。それはあなたがたふたりを太陽系の外へお連れすること
です》

「さっきも言ってたな、太陽系の外へ、と。【七月号】はそのために造られたと。太陽
系の外に何があるんだ？」

《母艦が待っています》

ふたりは思わず顔を見合わせようとしてヘルメット同士がぶつかった。フェイスシー
ルドがぶつかる、こつん、という乾いた音が静かな室内に響いた。

《説明しましょう。ことはあなたがたの祖先が地球で難破した時にまで遡ります。
十名が乗った調査船がゴビ海で撃墜された事件。それ以来、『襲撃者』は執拗に祖先た
ちを追跡しました。遊牧民が移住者グループを襲ったこと背景には、『襲撃者』とあ
なたがたの祖先、という構図があったのです。『襲撃者』はなぜ執拗に祖先を追ったの
か。当然その疑問があります。けれども、『襲撃者』が何者なのか、それは今もって解
明できていません。

わかっていることは、五万年前の時点で、『襲撃者』は完成された文明を持っていたということです。彼らははるかな太古に外宇宙からやって来て地球を見つけ、着陸し、所有権を主張しました。『ここは我々の領土である。外部からやってくるものは我々の権利を侵害するものとみなす』、と。

その主張のもとに、調査船は排除され、調査員は子々孫々まで、時間が経つあまりかれらの記憶が失われるまで、追われることになった。その構図は現代もなお生きている。クレス・グラヴァシュ、あなたはそのため襲われたのです》

「地球防衛軍のしわざじゃなかった？」

《『襲撃者』は……我々からしてみれば、ですが、彼らにしてみれば我々の方が侵略者であって、排除すべき対象なのです。彼らが己の権利、すなわち地球を防衛することは、至極当然な成り行きであるということがわかりますか？ つまり、地球防衛軍とは『襲撃者』の意識から発生した構想》

「———」

《そして、火星移住計画が進むにつれてわかったことですが、『襲撃者』の基地は太陽系内の至るところにあったのです。タカムラ教授とロビンソンCEOはあなたがたを護るために火星へ移しましたが、そこも安全ではなかった。タカムラ教授は『襲撃者』に襲われた——》

「タカムラ先生がなぜ!？」

《彼はあなたがたを地球から救出するために母星がひそかに派遣した者。幾千年も前に彗星とともに送り込まれ、地球人のなかに身を隠し、あなたがたの祖先を探した。そして彼らの子孫であるあなたがたが生を受ける前に、地球を脱する手段、つまり宇宙船を、独力で造り始めた。『襲撃者』の目があったため、地球人の持つ科学技術から突出

することを避けねばならず、母星の援助も受けられなかった。まったくの孤立無援状態での、独力だったのですよ》

「ぼくらに……そんな価値があるのか？」

マリナならぜったい言いたくもないセリフだった。けれど、その気持ちはわかる、と彼女は思った。

幾千年も前に彗星と共に送り込まれ、たったひとりで異郷をさまよい——それもこれも、あたしたちのために？

《忘れていただいても困りますが、あなたがたはふたりでひとり。祖先の直系がついにロビンとグラヴァシュだけになったとき、祖先が蓄積してきた情報を分散するために、ひとつの魂がふたり分の肉体を持つことに決めたのです。『襲撃者』の追求はそれほど熾烈だったのですよ》

《あなたがたの遺伝子には、祖先の五万年の情報が蓄えられていることを、忘れないで》

《あなたがたには有史以前から地球で行われてきたことを、法廷で証言する義務があるのです》

打ちひしがれていたクレスだったが、はっと顔をあげた。「——『襲撃者』は違法な存在だと！？」

《『襲撃者』の主張する論理のもとに、地球人の進化はあきらかに歪められてきました。違う言い方をすれば、地球人は幽霊のごとき存在に知らずに支配されてきたということ》

《地球人自らが今のままがよいというならそれだけのことです。しかしそれでもなお、『襲撃者』が既に絶滅した種族であったとしても、地球で行われている犯罪行為を銀河法廷に告発しなければならない、それが母星の揺るぎない方針なのです。そもそも、あなたがたの祖先たちはその調査のために送り込まれたのですから》

32

壁一面に据え付けられたモニター画面には太陽系の惑星軌道のラインと、そのさなかをするすると突っ切っていく輝く直線が映し出されている。輝く直線は【七月号】の航跡だ。むろん、イメージ上のものである。

惑星同士がどれだけ離れた距離にあるのかを思い出せば、【七月号】の移動速度の凄まじさがわかるというものだった。

それはあまりに非現実的で、たとえるものがまるで思いつかなかった。そしてふしぎなことに、マリナをとらえていたのは悲しみだった。それは『タカムラ先生』という存在への畏敬の念と、毎年ありあわせの材料で焼かれたバースデーケーキ、ともに過ごした日々の思い出が誘う感傷だったかもしれないが、己の口で的確に言える感情ではなかった。いったんもよおした涙はあっという間にあふれ、頬をびしょびしょに濡らした。

「ねえ、ちょっとの間、ヘルメット外してもかまわない？ 鼻をかみたいの」

《……どうぞ》

マリナは何度も鼻をかみ、涙をぬぐい、なかなかティッシュペーパーを手放せなかった。宇宙服を着たままだから、そんな細かい作業が意外とむずかしかった。となりでクレスはペーパーの箱を捧げ持っていた。

たった今、宇宙船は太陽系を亜光速で突っ切り、その向こうへ出て行こうとしている。たぶん、地球人類史上初よ、そんな重要かつ感動的な場面であるはずなのに、あたしはなにをやっているのかしら

「あたしたち、もう戻ってこれないの?」、と鼻声でつぶやく。

《それは、あなたがた次第》

「————」

《祖先は故郷へ帰るのに五万年かけたのですよ》

《十秒後に亜空間を出ます。気をつけて。すぐそこで母艦が待機してますから。モニターに映します……ごらんなさい……あれが、母艦。アルカイム……》

宇宙船七月号

応援ツール

応援していただくと筆者のモチベーションがUPします。

あとがき

Juliaという名前は七月Julyに由来してるんじゃないかなろうかということで、そのまま宇宙船の名前にしてしまおうと。双子のようで双子でないクレスとマリナに匹敵するインパクトがある！ ……はず！

現在連載中の『Salamander in the circle』は二万年前という設定ですが、このころユーラシア大陸はどうだったんだっけ。資料をひっくり返しているうちに出来上がってしまったのが、月刊誌のタイトルみたいな【宇宙船七月号】です。

深堀を始めるとSalamander inみたいに大風呂敷になってしまいそうなので、とにかくコンパクトにまとめました。これのせいで第二十五章、ほとんど手つかず、お待たせしています！

資料は[こちらのブログ](#)にざっとまとめてありますのでよかったらどうぞ。

2023年10月22日 記

奥付

宇宙船七月号

2023年10月30日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#) [ブログD&M](#)

表紙素材 [「イラストAC」](#)

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社
